

NPO法人 自立生活センター STEPえどがわ 会報

STEっ子パラダイス all for ワ ダフォー!!

えぬピーおーほうじん
じりつせいかつせんたー
すてっぷえどがわ
かいほう
すてっこぱらだいす
おーるふおあわんだふおー

ねん がつごう
2019年 10月号



アメリカ研修にて、STEっ子3名はチョット背伸びをし、あの「ビクトリアシークレット」に自主研修へ向かいました。「3つ買えば3つタダ!」というフレーズに魅かれ、介助者・通訳者・STEっ子の合計6人で1枚ずつ欧米風おパンツを調達。履きなれないタイプに文化の壁を感じ帰国しました。8月下旬、誕生日が隣り合う今村理事長と素敵な寄せ書きをいただき、夏の終わりを感じたのでした(そ)。



目次

も く じ



す て っ ぶ STEP えどがわバスハイク	いとうけいこ 伊藤圭子	2
す て っ ぶ STEP えどがわバスハイク	いけがみともこ 井家上智子	3
もぐらまつり もぐら祭 2019		5
えどがわく 江戸川区ボランティアフェスティバル 2019		6
すずね しゅわ 鈴音の手話コラム	お ん て な たいけん ontenna 体験	7
ゆめみ 夢見るころを過ぎても		8
す て こしさつだん い ん STEP っ子視察団 i n アメリカ	そだ なつ き 曽田夏記	12
す て こしさつだん い ん STEP っ子視察団 i n アメリカ	く どう と し こ 工藤登志子	14
す て こしさつだん い ん STEP っ子視察団 i n アメリカ	た な か す ず ね 田中鈴音	16
どうなる！？ じゅうどほうもんかいご 重度訪問介護		19
とも い しゃかい かんが かながわしゅうかい 「共に生きる社会」を考える神奈川集会 2019		21
けー ぽ っ ぶ みち K-POPへの道		24
おとな しゃかいかけんがく 大人になつての社会科見学	こうじょうけんがく ～サントリービール工場見学～	26
かい い ん ぼ し ゆ う 会員募集		30

は おんな よ 晴れ女と呼ばれているのに、 ひ あめ ふ わたし あの日はなぜ雨を降らしてしまったんだろう…私

いとう けいこ
伊藤 圭子

6月29日に八景島シーパラダイスに行ってきました。私はステップのバスハイクは初参加で、あまり旅行慣れしていない私は前日からワクワクそわそわ！「明日は何時に起きよう」とか、「朝ご飯どうしよう」とか（「バナナはおやつに入るのか？」も、もちろん）悩みました。



そして当日家を出たら・・・ポ ツ リ・・・ポツリ・・・ポツポツ・・・ザーっ！「まあ仕方ない梅雨だからなあ」と元気モードにしていざ八景島へ。現地に到着して、お昼はバイキング・・・カレーに唐揚げ、ケーキにムースと普段は私の食べないステキな食事をしました。シーパラでの私の幸せな時パート1になりました。腹ごしらえをしたところで、いよいよ水族館へ、白くまのモフモフ感やクラゲのホンワリ感をガラス越しに感じ、海のトンネルでえさやりを見たり、群れるペンギンを見て「ペンギン飼いたいなあ・・・」とのほほーんと思ってみたり、普段の緊張から離れた時間になりました。水族館での私の幸せな時パート2も、あっというまの出来事・・・でも私にとっては令和初の旅行、それも久しぶりの団体旅行で、新しいヘルパーさんや初めてお会いする利用者さんとお話できたことも、とても楽しい思い出ができました。



シーパラで感激したことは、車椅子の人用の休憩室があったことです。車椅子からベッドに降りて、体を伸ばしたり着替えもできるので、気分的にも身体的にも楽でした。「あそこに行けば、体も心も快適になる」・・・こういうことがバリアフリーなのかもなあと思いました。

いろいろ思わせてくれた今回のバスハイク、準備して下さったスタッフの皆さん、いっしょに行って下さったヘルパーさん、楽しい時間をありがとうございました。それでも、あの日の雨は・・・晴れ女と呼ばれている私としては、納得いかず。気持ちとは違う方向に体が動いてしまうのが私・・・それを思えばあの日の雨もありかな？（笑）。

いけがみ ともこ
井家上 智子

STEP えどがわのイベントを担当している井家上智子です。2019年6月29日に第2回となるバスハイクを行いました。

今回は《横浜・八景島シーパラダイス》。参加者は利用者さん・介助者・スタッフ等合わせて50名。今回は大型バス2台で行きました。

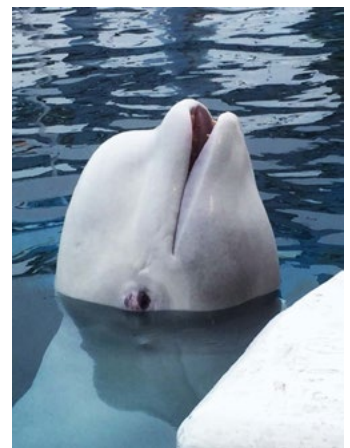
お天気はいつも通り・・・つ〇屋さんの仕業？台風3号の影響であいにくの雨でしたが、到着し昼食バイキングを終えた後の自由行動時間には、雨も弱まりそれぞれ好きな場所へ。

《横浜・八景島シーパラダイス》では、毎日イベントを行っているそうで、私が注目したのは【Mr.マリックプレゼンツ、シーパラダイス超魔術団】。行ってやっぱり!? Mr.マリックはおらず(笑)。シーパラダイスのマスコットがサングラスを掛け、Mr.マリック風。内容はセイウチのイリュージョンやお絵描き、シロイルカやイルカのショー等盛りだくさん!! とても楽しい時間でした。

その他にも、たくさんの動物と触れ合えるプログラムがあったり、マンボウやペリカン、カピパラの入浴タイムや、コメツカミカワウソの食事タイム等もあり、それぞれの場所にかわいい動物たちも沢山観ることが出来ました。

島内は、それぞれの観覧席に車いすスペースがあり通路の幅も狭くはなく、また、建物同士のほとんどが通路に屋根を付けて繋がっているの、雨の中でも比較的雨に濡れることなく移動が出来ました。

多目的トイレにはベッドが置かれている個所もあり個数も





あったので、おトイレ^{しんばい}心配^{かた}な方にも安心^{あんしん}。

今回はまだ2回目という事で、手配^{てはい}や
事前準備^{じぜんじゆんび}が間に合わず到着^{とうちゃくご}後に雨の中皆様^{あめ なかみなさま}
に大移動^{だいどう}させてしまった事に大反省^{だいはんせい}…。ま
だまだツアーガイドとしては未熟者^{みじゆくもの}ですが
お目^{おめ}に見^みていただければ助^{たす}かります…。

バスハイク企画^{きかく}はまだお試^{ため}し中^{ちゆう}で、今後^{こんご}の開催^{かいさい}は未定^{みてい}ですが、STEP えどがわの
イベントは他^{ほか}にも色々^{いろいろ}あります。今回参加^{こんかい}していただいた方^{さんか}も、普段参加^{ふだん}が難^{むずか}しい人^{ひと}
も、是非^{ぜひ}STEP えどがわのイベントに参加^{さんか}してみてください。たくさんの方^{かた}との
交流^{こうりゅう}を通して繋^{つな}がりの輪^わを広^{ひろ}げていただけたら光栄^{こうえい}です。

ご参加^{さんか}いただいた皆様^{みなさま}、ありがとうございました。



もぐら2019



なかそね ともあき
中曽根 知明



2019 年 7 月 28 日に江戸川区春江町にある「もぐらの家」という障害者支援施設にて、毎年恒例のもぐら祭が開催され今年も参加しました。あいにくこの日の午前中は大雨予報が出ていて開催が危ぶまれていましたが、何とか雨が降ることなく午後から真夏日となり、大いに盛り上がりました。

ステージでの生バンド演奏やボランティア学生によるフランクフルトの屋台や、バザー、それから各団体の創作品販売など多くの方々
が来られており、STEP もいろんな団体と交流
させて頂きました。

お祭りの最後に行われる恒例のスイカ早食い競争では、昨年に続きSTEP 関係者が優勝し二連覇を達成しました。(過去にSTEP のスタッフが毎年優勝して殿堂入りしてしまったことが・・・)

もぐらの家の方々は毎月第二金曜日に行われるSTEP のバザーにも参加し様々な創作品の販売を行っておりますので、お時間がある時はお立ち寄りください！！

もちろん来年のもぐら祭も参加しますので、みなさんも行ってみてくださいね！！



2019えどがわボランティアフェスティバル

さん か ほう こく 参加報告

なか かね ともあき
中曽根 知明

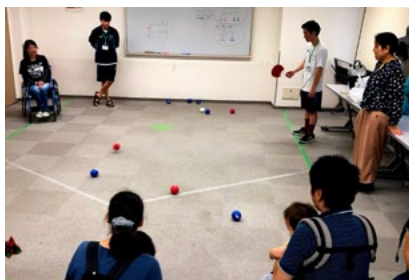
2019年7月14日に江戸川区船堀駅の隣にあるタワーホール船堀にて毎年恒例の「ボランティアフェスティバル2019」が開催され今年もSTEPは「学びと体験コーナー」のブースにて参加してきました。

昨年までは主に車椅子体験のコーナーを行っていましたが、今年はパラリンピックの正式競技でもある「ボッチャ体験」を行い、多くの子供からお年寄りの方々がブースに訪れてくれました。

最近テレビなどでボッチャが紹介されるためほとんどの方が競技のこと知っていましたが、実際に行う機会がなく難しさも実感されていましたが、みなさん楽しみながら体験して頂きました。ボッチャ体験を行ってもらう時に車椅子に乗ったり、利き手とは逆の手で投げたり、ボールを握ることが出来ない人が使うランプで投げてもらったりとそれぞれ条件を付け行ってもらいました。正式な競技の広さではないながらもボッチャ体験して頂き、とても楽しい時間をみなさんと過ごすことができました。

また、ボッチャ交流大会が開催されSTEPボッチャサークルがお見事に優勝することが出来ました!!

これも日頃の練習の成果! ? かもしれませんが、STEPでは「スタイリッシュワールド」というボッチャサークルがありまして、その練習のおかげかと……。もしサークルに興味がある方は遊びに来てください。



「あ、音がいた」 ～ontenna体験～

たなか すずね
田中 鈴音

ちょうかくしょうがいとうじしゃ すずね
聴覚障害当事者スタッフの鈴音です。わたしは
じゅうど ちょうかくしょうがい おんがく だいす おんがく
重度の聴覚障害ですが音楽は大好きです。音楽を
たの じゅうよう おと しんどう おお
楽しむにあたって重要となるのが「音の振動」。大
きなヘッドホンを装着して大音量にし、ヘッドホ
ンに手を当てると振動が伝わってきます。そうし
て音楽を楽しんでいます。ある時、振動を使って
おんがく たの とき しんどう つか
音を体で感じる「髪留め」がある！？という情報
おと からだ かん かみど じょうほう
を入手し、調べたところ偶然都内で体験会が開催
にゆうしゆ しら ぐうぜん とない たいけんかい かいさい
されていたのですぐに行ってきました。

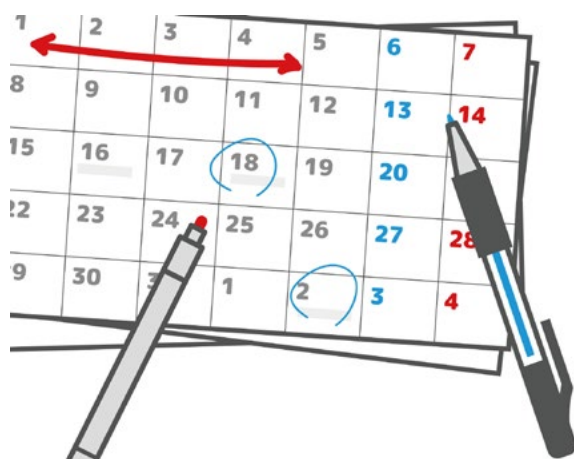


ほんとう かみど かたち おお きかい なまえ お ん て な きかい かみ
本当に髪留めみたいな形・大きさの機械で名前はontenna。この機械は髪
のけ みみ えりもと そでぐち み つ しんどう ひかり おと とくちょう からだ かん
の毛や耳たぶ、襟元や袖口などに身に付け、振動と光によって音の特徴を、体で感
じることができます。音の大きさを256段階の光と振動の強さにリアルタイムに
へんかん おと とくちょう つた つか き ひと き
変換することで音の特徴をユーザーに伝えるものであり、聞こえない人と聞こえる
ひと たの みらい め ざ ふじつうかぶしきがいしいや ほんだ たつや き ひと
人がともに楽しむ未来を目指し、富士通株式会社の本多達也さんが聞こえない人と
きょうどう かいほう たいけんかい かいほうしや ほんだ あ
共同で開発したそうです。体験会で開発者の本多さんにお会いすることができまし
た。本多さんは手話もできますし、ontennaの開発時にもプロトタイプを何度
つく ちょうかくしょうがいしや じっさい つか
も作って聴覚障害者に実際に使ってもらいフィードバックをもらってまた作る、とい
うてっいてき めせん かいほう
う徹底的なユーザー目線で開発されたそうです。

わたし ほんだ せつめい う じっさい お ん て な そうちやく おと だ
私も本多さんの説明を受けながら実際にontennaを装着し、いろんな音を出し
てもらい試してみました。ontennaが発する光や振動の強さから音の特徴を捉
えることができます。例えば、わたしはセミが「ミンミン」と鳴くのは本から学びま
したが、どういうリズムで鳴くのかは知りませんでした。聞こえない人はリズムを掴
むのが難しい、できないのです。でもontennaを通してなら、リズムというも
のがどういうものなのかわかってきます。さらにontennaを使えば後ろから車
がちか おと 音がわかるようになります。もっとontennaを通していろいろな音を
かん おも
感じてみたいなと思いました。

夢みる頁も過ぎても ～脳性麻痺でADHDのぼくの回顧録～

せきぐち さとる
関口 悟



ここではぼくが今まで限られた人たちに打ち明けてきたことを話そうと思う。ぼくは脳性麻痺だけでなく、ADHD（注意欠陥多動性障害）という障害があり、自分の中でのスケジュール管理、タスク管理、対人コミュニケーション、怒りのマネジメント、金銭管理、体調管理がうまく出来ないことがしばしばある。成人してずいぶん経って

気づいたとはいえ、ぼくはそのことについて周囲に話して理解を得ようとせず、結果として周囲の信頼をいつも裏切ってきた。

ぼくの場合、約12年前に母を亡くし独り暮らしになった後、40代を過ぎて最初の職場を「休職期間満了後も職務復帰不能」という理由で解雇され（表向きは自己都合による退職だったが）、紆余曲折を経て今の職場に至る。それでも最初の職場でADHDのネガティブ面がもとで犯した失敗を再び繰り返し、職場での信頼を得られないでいるように思う。

50歳を過ぎて、ある個人的な出来事でそのことに気づき、それでもなかなか自分の思いを周囲に伝えることができずにいたが、ここで話してしまおうと思った次第である。

話はだいぶさかのぼるけれど、ぼくは最初の職場に就職した後、外部の訓練所で一年間大型コンピュータのプログラミングを学んだあと、社内の情報システムを開発する部署に配属された。職場で「新人」と呼ばれる最初の2～3年は、上司や先輩方から仕様書を渡されて、その通りにプログラムを組んで正常に動作するかどうかのテストだけしていればよかった。

その頃はまだ若くて体力もあったから



職場を休むこともほとんどなかったし、
 東京都江戸川区から千葉県柏市という
 遠距離通勤だったから、職場も定時後の
 残業や休日出勤は免除してくれていた。
 職場での人間関係も概ね円滑だった。配属
 3年を過ぎたあたりから仕様書を書いたり
 するようになるけれど、それもシステム
 開発を担当する上司や同僚からプログラム
 の処理の詳細を聞いて書くので大して苦痛
 ではなかった。むしろ、上肢に障害のあるほうがプログラムの仕様書を書くためにワー
 プロ専用機を買ってくれたぐらいだ。



その良好な職場の関係が破綻し始めたのは、配属5年を過ぎたあたりだろうか。ば
 くが仕事中に急に頻脈を起こして、その後から2～3週間ほど職場に出勤できなく
 なってしまった。別に職場に不満があったわけでもないのに、身体のあちこちが不調
 をきたして食事摂れない。うっかり家の医学書を読んで思い当たるフシが頻出し
 て自分が何か重病にかかっているように思えてならない。けれども、一般の病院で
 循環器系の精密検査をしても異常はないという。ここまできると家族との関係もぎ
 くしゃくし始めた。その時に職業訓練所の恩師の紹介でかかった代々木のメンタル
 クリニックでパニック障害及びうつ病と診断された。後年、うつ病はADHDの
 二次障害として発症することがあることを知るのだけれど、まだADHDや「大人
 の発達障害」なんていう言葉は一般的ではなかった時代。この時は大して上司から咎
 められたりということはなかったけれど、周囲の接し方が腫れ物を触るような感じに
 変わっていったのを感じている。



けれども決定的に職場での人間関係
 が悪化し、処遇が悪くなっていった
 きっかけは、職場の社内向けシステム
 開発を任される立場になったこと。も
 ちろん他の部署の担当者と何度も会議
 をして、どういうデータをシステムに
 入れて、どういう結果がシステムから
 出力されて欲しいのかを詰めていく
 のだけれど、頭の中でそのシステムの

イメージが湧かないのである。今までは上司がシステムのイメージを図式化してくれていた^{しごと}ので、仕事^{じぶん}ができたけれど、自分がその立場^{たちば}になって頭^{あたま}の中でシステムのイメージが湧かないのは致命的である。しかも、それについて周囲^{しゅうい}に助けを求めることもしなかった。否^{いな}、「自分が窮地^{きゅうち}に陥^{おち}ったときに誰か^{だれ}に助けを求める」という発想^{はっそう}そのものが^で出てこなかったのだ。

こういう部分^{ぶぶん}も ADHD^{えーでいーえいちでいー}などのいわゆる「大人の発達障害^{はったつしょうがい}」によるものなのだろう。けれども、当時はそんなことを自分も周囲^{しゅうい}も知るはずもなく。そのまま見よう見まねで、でたらめなスケジュールを組んだところで、それを守れるわけがない。システム開発^{かいはつ}を他の同僚^{ほか}に肩代わりしてもらったものの、大幅^{おほば}に納期^{のうき}が遅れて他の部署^{ほか}にも迷惑^{めいわく}をかけることになって、ぼくの信用^{しんよう}は地^ちに墮^おちた。そういう状況^{じょうきょう}で自己肯定感^{じここうていかん}を持てるはずもなく。



よく、これで懲戒処分^{ちやうかいしよぶん}にならなかったと今は思うが、ぼくは再び仕様書^{ふたたび しようしよ}をもらってプログラムを作るだけの立場^{たちば}に戻^{もど}った。しかも、困ったことにもう配属初期^{はいぞくしよき}に何年もやってきたことだけに「飽きる」のである。おまけに東京^{とうきやう}から千葉^{ちば}という遠距離通勤^{えんきよりつうきん}だけに、年齢^{ねんれい}的にも一週間フルタイム勤務^{いっしゅうかん きんむ}がつらくなる頃^{ころ}でもあった。月1～2回^{つき}仕事を休むのが常態^{じやうたい}化^かし、出勤^{しゅつぎん}しても身体^{からだ}がつらくなると就業時間^{しゅうぎやうじかん}中に勝手^{かって}にトイレの「個室^{こしつ}」に逃げ込んで仮眠^{かみん}をとる始末^{しまつ}。これが上司^{じようし}や同僚^{どうりやう}にばれるのは時間^{じかん}の問題^{もんだい}だった。

自分のいる課^かの課長^{かちやう}や勤務課長^{きんろうかちやう}から会議室^{かいぎしつ}に呼び出されて、今ならパワハラ^{いま}と言っていいほどの叱責^{しっせき}を受けることもしばしばあった。時には自分の課^かの課長^{かちやう}の机^{つくえ}で同僚^{どうりやう}に聞こえるほどの大声^{おおこえ}で叱責^{しっせき}されることもあったが、周りにいた同僚^{どうりやう}は誰も助け^{たす}てくれなかった。仕方ない。皆、自分が可愛い^{かわい}のだ。ましてや上司^{じようし}や同僚^{どうりやう}が頭^{あたま}をひねり出してまで与えてくれた仕事^{しごと}もまともにしないような人間^{にんげん}に助け舟^{たすけふね}を出す義理^{ぎり}はない。



課長^{かちやう}たちの叱責^{しっせき}で一番^{いちばん}こたえたのは母^{はは}を呼び出されたことだろうか。懲戒解雇^{ちやうかいかいこ}をちらつかせながらあれこれ説教^{せつぎやう}されては自分の母^{はは}でなくともこたえるだろう。課長^{かちやう}たちにとっては正直^{しやうじき}、権限^{けんげん}があれば懲戒解雇^{ちやうかいかいこ}したいのが本音^{ほんね}だっ

ただらうし、母もぼくが解雇されるのを怯えていた。職場から呼び出された後、しばらくは母のぼくへの接し方は厳しくなっていた。当時はパワハラなんて概念はなかったし、自分がしていた業務怠慢を考えれば、課長たちがしていたことをパワハラと言えるかどうかは今の価値観でも微妙だろう。

こういう仕事の出来不出来にムラのある人間にとって、コンスタントに仕事をこなす、その成果が要求される会社勤めは無理があったのかもしれない。今の職場でもこの悪い傾向が出ている気がする。



もちろんこの悪い傾向は自分の本意ではない。とはいえ、ADHDの治療法は未だ確立されていないうえに、若い頃のようにバリバリ仕事をするには歳を取りすぎた気がする。「脳性麻痺者の場合、実年齢に十歳足した数値が肉体年齢だ」と、脳性麻痺者の仲間うちでは言われているだけに。

ここまで書いてきたように、脳性麻痺者でありながら、小さい頃から母の欲目で

「うちの息子は頭がいい」と言われて障害を持たない同世代の仲間と学び育ち、いざ社会に出てみると、調子に乗ってぼくは自分本位の言動に走り、実社会が要求する「社会人」の要件を自分が満たしていないことで、周囲の信頼を得られずつらい思いをしてきた。時代とともに常に更新される知識や能力だけがあっても、仕事の約束を守ることで得られる職場の仲間たちの信頼がなければ、自分のやりたい仕事はできないのだ。人生のエンドロールにはまだ時間があるけれど、ADHDも含めた少ない持病や脳性麻痺の二次障害が、今以上にコンスタントな仕事の進捗や、仲間たちから信頼を託された仕事をするのを困難にしていけるのだろう。そんな中でも自分が生きてきた証を残したい。こうして職場の会報に文章を書くことで、その思いはある程度かなえられているけれど、職場を代表して書いている文章だけに、それと相反する自分自身の思いが書けずにイライラするときもある。そして身体が動くうちにもっといろんなことをしてみたい気持ちもある。けれども、今は自分ができることを全力ですることが先決のように思う。自分に甘かった「夢みる頃」を過ぎても、近い将来、皆に信用されて自分が苦手な部分を助けてもらいながら、自分のやりたかったことを目指すために…。

あいのわ だすきんかんのねんきん
STEっ子視察団 アメリカ研修報告

「ウェルカム」からはじまる多様性

そだ なつき
曾田 夏記

〇心からの「ウェルカム」



「レインボーフラッグが入口に掲げてあるコーヒーショップでは、心が安らいでいるな、って感じるの」。これは、シカゴの自立生活センター（CIL）「アクセスリビング」の副代表でLGBTQ当事者のデージーさんが語った言葉です。デージーさんは続けて、「アクセスリビングの受付に、大きなレインボーフラッグが掲げているのに気づいたでしょ？あれは、私たちのセンターを訪問するLGBTQのひとたち、それはまだ

カミングアウトしていない人たちに對しても、『ここは、あなたを心からウェルカムしている場所だよ』というメッセージをハッキリと伝えるためなの。』と言いました。私は、「心からのウェルカム」が、「CILにおける多様性」を考える時にやはりとても大切なことだと感じました。

私の中で、「多様性」「障害種別を超えて」という言葉を聴く時、また自分が発する時に、ずっとどこかで違和感がありました。それは、この「心からのウェルカム」と「必要なサポート」がない中で形だけ整えられる「多様性」は、誰の、何のための「多様性」なんだろう？という違和感でした。「多様性」「障害種別を超える」こと自体が目的化し「やらないといけないこと」になるほど、不安や義務感から「必要なサポート」は用意されても、（あなたがここに来てくれてうれしい）という「心からのウェルカム」は失われてしまうと感じました。

逆に、自分たちの多くとは「ちょっと違う人」が私たちのセンターのドアをたたいてくれた時に「心からのウェルカム」と、その気持ちが前面に出ているような徹底したサポートがあれば、「多様性」はあとからついてくるのではないかと思いました。

○「クロス」しにゆく私たち

アクセシビリティの取り組みで印象的だったことは、「障害」コミュニティから「LGBTQ」や「不法移民」のコミュニティに手を伸ばし、パートナーシップを積極的に強化していたことでした。そして、それら実践の背景には、「そうしない限り、『障害のある不法移民』『障害のあるLGBTQ』といった複合的な差別を受けているひとりの仲間を本当の意味では救えない」という、現場に根差した強い理念がありました。取り組みの中には、「障害」と「不法移民」のそれぞれの分野で活躍する弁護士たちをつなぐものや、地域のLGBTQ団体と相互にスタッフ研修をしあうなどの実践がありました。アクセシビリティのスタッフが、経験から（こうした取り組みを通じ）「両方のコミュニティが強くなれる (Both will be stronger.)」と確信をもって語っていたことが印象的でした。

米国CILの「実践の現場」から学んだことは、次世代の障害者運動を強くするのであれば、センターの中にとどまらず、もっともっと外に出ていかなければいけないということでした。自分たちの団体の中にとどまっている限り、「クロス」する現象は当然おきないからです。障害種別の異なる人たちとも、異なる理由で差別をされている人たちとも、さまざまな理由で生きづらさを感じている「健常者」の人たちとも、



つながることはできないままです。

アメリカの障害者運動の強さは「ADA法を作る時に多様な人が参加したことが出発点」という話を、今回多くの場面で耳にしました。「ADA法の父」と呼ばれるジャスティン・ダート氏は、自分が経験していない「さまざまな差別」を学ぶことが出来る人だった、とジュディ・ヒューマン氏が述べています。未だ見聞きしていない「差別」を学ぶために自ら足を運び、さまざまな人と交わり（「クロス」し）、共通の信頼関係と深い相互理解の中で同じ目的のために一丸となれる、そんな次世代の障害者運動を作っていきたいと思います。

す て こ し さつ だん STEっ子視察団 アメリカ研修報告
けん しゅう ほう こく

くどう としこ
工藤 登志子

7月17日から8月1日までの15日間、ダスキンの愛の輪基金の助成を得てアメリカへ研修に行ってきました。研修で学んだ真面目なお話はすでにスズーネとナトゥーキがたくさん書いてくれているので（言い訳じゃないよ!）、そして一般向け報告会も予定しているので（みんな来てね!!）、私からはあえて違う視点から、報告書や報告会では語らないであろうことを報告してみたいと思います ^_^

まず、食べ物について。STEP えどがわダイエット部の部長と言えばこの私。今回のアメリカ研修でもご当地グルメを密かな楽しみにしていました。行く先々で美味しい料理をたくさん食べましたが、その中でも特にインパクトのあったものTOP3は・・・



とつぶすりー



なんばーすりー No. 3: アメリカに到着した初日の夜にみんなで食べたディープディッシュピザ! 厚みが3~5cmはあろうかというほどのボリュームでチーズがこれでもか!というほど乗っていました。あんなに伸び~るチーズは初めて見た・・・。(画像参照)

なんばーつー No. 2: シカゴにあるメキシコ人居住区 (Pilsen) で最もポピュラーなスパイシーマンゴーアイス!! Access Livingで障害のある移民のサポー

ト^{おこな}を行っている^{とうじしゃ}当事者スタッフ、ミシェルが連れて^い行ってくれた^{まちなか}街中のごく^{ふつう}普通のアイス^やクリーム屋さん。客層^{きゃくそう}は20代^{だい}くらいの^{わかもの}若者が多く、^{おお}彼らが^{かれ}こぞ^{ちゅうもん}って注文^{わかれ}していたのがこのスパイシーマンゴーアイスであります。我々^{まね}も真似^かして買^{かう}って見たのですが・・・えっ、コチュジャン!?!?!?と^{のう}脳^{こんらん}が混乱^{あじ}するお味^{あじ}。。。うーん。国^{くに}が違^{ちが}えば味覚^{みかく}も違^{ちが}う。我々^{われわれ}は一口^{ひとくち}でギブアップ^{すす}してしまいましたが、^{げんち}現地^{かたがた}の方々^{ほんとう}にとっては^{おい}本当に美味^{おいしい}らしい。心^{こころ}からお^{すす}勧め^{すす}してくれ^{すす}たミシェル・・・ごめん。でもこのアイスのおかげ^{おかげ}でミシェルとお出^でかけ^でしたことが^{わす}忘れ^{おも}られない^{おも}思い出^でになりました。



なんばーわん
No. 1: ロチェスターで^た食べた^{ちようび}超^び B I G な^{あんど}リブステーキ&マッシュポテト!!!

「ダイナソー^{ばーべきゅー} B B Q (恐竜^{きようりゅう}の^{てんめい} B B Q)」という店名^{てんめい}からしてワイルドさが^{きわだ}際立つステーキレストラン^たで食べた^たリブステーキです。

まさに恐竜^{きようりゅう}のもの^{おも}と思うほどに^{おお}大きく、そして口^{くち}に入^いれたとたんにとろける^{やわ}柔らかさ^{やわ}でした。一皿^{ひとさら}を我々^{われわれ}日本人^{にほんじん}が数人^{すうにん}がかりで^た食^{たい}べていたの^{しーでいーあーる}に対して^{かたがた}CDR^さの方々は^{ひとりひと}一人一皿^{ひとりひと}だったのがカルチャーショック^さでしたね。それと、ロチェスター^{ろちえすたー}に着^ついた際^{さい}「マッシュポテト^たが食^{わかし}べたい」と私^{わたし}がつぶやいて^きいたのを^の聞き逃^{おぼ}さず覚^さえていてくれ、マッシュポテトのある^{みせ}お店^{みせ}に連^つれて^つてくれた^{しーでいーあーる}CDR^{みな}の皆さん^{ふだん}。普段^{ふだん}から^{ちい}こういう^き小さな^で気づかい^きが^{だれ}出^で来る^とから^{のこ}誰も^{かつどう}取^でり残^でさない^で活動^でが^き出^で来る^でんだな^きあと思^{おも}いました。

・・・と、食^たべ物^{もの}の話^{はなし}だけで紙面^{しめん}を^{つか}使^{つか}ってしま^{つか}いましたので、続^{つづ}きは^{つづ}またいつか^{また}どこか^{どこか}で～。

しー ゆー すーん

See you soon!



STEっ子視察団 アメリカ研修報告

たなか すずね
田中 鈴音

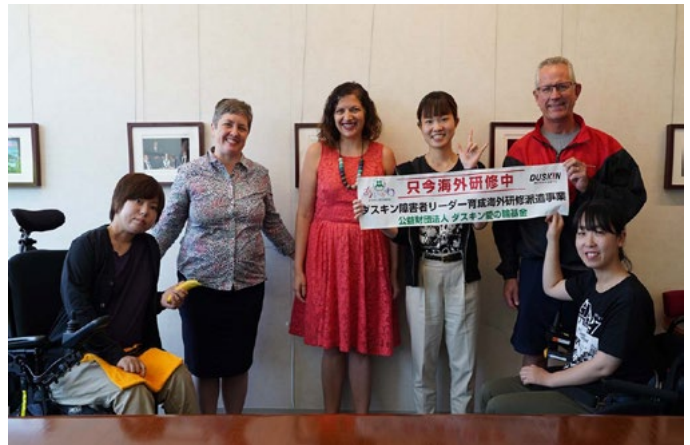
今回の研修でC I Lに関わっている聴覚障害者とたくさん出会うことができました。なかでも、聴覚障害リーダーとして強い運動をしている権利擁護活動家の2人、アクセスリビングのアンバーとCDRのジョナサンとはたくさんの時間を共に過ごし、たくさん話をしました。

アンバーはAccess Livingのスタッフで聴覚障害者やLGBTQなどを中心にいろんな生きづらさを抱えた人たちの権利擁護を主に行っています。彼女の存在はSTEPに入って、いろいろな人からアメリカにパワフルな聴覚障害の女性リーダーがいるよ、いつか会えたらいいね！と言われていたので知っていました。あこがれの人です。

もう一人がジョナサン。とても熱い運動家。彼もまた聴覚障害者だけではなく、いろんな仲間たちのために闘っています。

まずアンバーがいるAccess Livingには、ろう者が他にも数人います。Access Livingの

代表のマーカはセンターにろう者を巻き込もうとしたときに、まず手話通訳者を雇ったそうです。アンバーは私と同じく音声で話しますが、必ずそばに手話通訳者がついていて、コミュニケーションが常に保障されている状態でした。アクセスリビングに



あるエレベーターは、地震などでエレベーターが止まった時に聴覚障害者もインターホンを使って外部と連絡が取れるように文字で入力して発信したり、相手側が入力したものを文字で表示するという装置もついていました。こういった工夫はとても大切なことだと思います。

CDRでは、C I Lの中ではまだ珍しいろう・

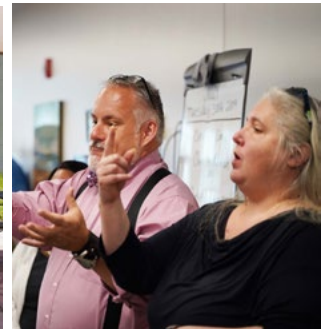


もう しょう しゃむ つうやく つうやくかいじょ
盲ろう者向けの通訳 / 通訳介助
サービスも担^{にな}っていて、ろう者
や盲ろう者が地域生活^{ちいきせいかつ}を続ける
ためのサービスも提供^{ていきよう}していま
す。例えば就職活動^{しゅうしょくかつどう}に困^{こま}ってい
る時^{とき}どうやったらうまくいくか
いっしょ ^{かんが} 一緒に考えたり、美術館^{びじゅつかん}などに
行^いってろう者の客への対応方法^{しや きやく たいおうほうほう}
のトレーニング^{おこな}を行^{おこな}ったりもし
ているそうです。

スタッフもとにかくいろいろな人^{ひと}がいて、そのなかで、C D Rで行^{しーでいーあーる}われる会議^{かいぎ}では、
手話通訳^{しゅわつうやく}はもちろん、文字通訳^{もじつうやく}や資料^{しりよう}がある場合は拡大文字^{ばあい かくだいもじ}、点字^{てんじ}、事前にメールで
お^{おく}送^こるなど個人のニーズ^{こじん}に合わせた対応^あを徹底^{たいちう}して行^{てつてい}っており、誰も取り残^{おこな}さないとい
う姿勢^{しせい}が強く伝わ^{つよ}ってき^{つた}ました。

C D Rが本物の誰も取り残^{しーでいーあーる}さないセンター^{ほんもの}になっているのは、代表^{だいてい}ブルースの
存在^{そんざい}が大きいと思^{おも}います。C D Rでの研修^{しーでいーあーる}の中に、日本語^{にほんご}、英語^{えいご}、アメリカ手話^{しゅわ}、
アメリカ手話^{しゅわ}の触手話^{しよくしゅわ}に加^{くわ}えて日本手話^{にほんしゅわ}が必要な私^{わたし}で話^{はなし}をする時間^{じかん}がありました。
通訳者^{つうやくしやなんにん}何人^{だれ}いるねん！と、もはや誰^{だれ}が通訳者^{つうやくしや}で誰^{だれ}がスタッフ^{じようきよう}だかわからない状況^{じようきよう}。そ
れでも通訳者^{つうやくしや}をはじめブルースが指示^{しじ}をだしなが^{いっしょうけんめい}らみんなが一生懸命^{わたし}になって私たち^{わたしたち}
に情報保障^{じようほうほしやう}をしてくれました。ブルースは一人一人^{ひとりひとり}の顔^{かお}を確認^{かくにん}しながら、わかってい
ない顔^{かお}をしている人^{ひと}がいたら話^{はなし}を止^とめて「大丈夫^{だいじょうぶ}？」と確認^{かくにん}したり、話^{はなし}をするペース
が速^{はや}くなってきたら「ゆっくりね」と声^{こえ}を掛^かけたり、あるときはブルース自身^{じしん}が手話^{しゅわ}
でろう者^{しや}に確認^{かくにん}をしたり。

みんなが分^わかるまで待^まつことが徹底^{てつてい}されていて、情報保障^{じようほうほしやう}が必要な人^{ひと}がたくさんい
ましたが私^{わたし}含^{ふく}め誰^{だれ}一人^{ひとり}取り残^こされていない会議^{かいぎ}にすごく感動^{かんだう}しました。STEP^{すてっぶ}もそ
んなセンターにな^{つよ}ったらいいなと強^{おも}く思^{おも}いました。つづく。



マーカさん追悼

いまむら のぼる
今村 登

今回最初に訪問したシカゴのCIL、
Access Livingの前代表であった
マーカさんが、9月8日に永眠（享年66歳）
されました。彼女がアメリカの障害者運動と
施策に与えた功績と存在の大きさは、全米の
ニュースで流されるほどの偉大な障害者リー
ダーでした。それほどの大物な彼女ではあり
ますが、誰に対しても分け隔てなく気さくに声をかけて、愛情と情熱をもって接し
て下さいました。この5年間で日米の自立生活センターの交流と連携関係はとても
良好で強いものになり、2017年には日米が連携して、ワシントンDCでグロー
バルILサミットを開催し世界中の自立生活センターのネットワークとしてWIN
(The World Independent Living Center Network) を設立することができました。こ
うした流れをずっと応援し後押ししてくれたのが、マーカさんでした。

今回、STEP子視察団が訪問する前から、体調が優れないことを聞いていたの
で、シカゴでお会いできるか心配していましたが、思いの外お元気そうなお姿で現
れ、再会できたことと、初訪問の鈴音とイケちゃんを紹介でき、とても感激してい
ただけに、そこから約ひと月半での訃報は悲し過ぎます。本会報の読者には、マー
カさんのことをご存じない方の方が多いかと思いますが、障害者の自立生活運動は、
こうして先人の遺志が国境を超えて繋がりが広がり受け継がれていく、その代表的な
リーダーの一人であるマーカさんのことを少しでもお伝えしたく、研修報告の中に
含ませていただきました。心よりマーカさんのご冥福をお祈りします。



どうなる？ 重度訪問介護

いまむら のぼる
今村 登

■ 国の動き



この夏の参議院選挙で、れいわ新選組からお二人の
重度障害の当事者議員が誕生されました。そしてこのこ
とがきっかけで、通勤・就労中に重度訪問介護サービス
が使えない問題がクローズアップされることとなりました。
世間的には、初めて聞く問題だろうと思いますが、
JIL・DPIなどでは、障害者自立支援法以来、かれ
これ10年以上前から改善を求め続けてきた問題です。
大変時間がかかったとはいえ、ようやく日の目を見ること

になり、ある意味喜ばしい状況ではあります。厚労省内での
検討が始まったり、与野党内でも検討が始まるようです。こ
の機会に問題の改善が進むことを切に願っています。

他方、外出を規制している厚労省告示には、通学・就学中
の利用もできないとされてる問題も残っていて、今回こち
らの問題も併せて解決することが望まれますが、厚労省も
与野党も、検討の項目に含まれているのか定かでないの
が非常に気になるところです。告示の改定は法律の文章
ではないので、法改正までする必要はなく、厚労省の
判断でできるものと理解していますが、そうはいつでも
なかなかハードルは高いようです。それでも世論の関心
が高まり注目を浴びることは、問題解決のためには重要
なことです。新聞の読者欄に投稿するとか、SNS
で関連情報をシェアしていくとか、地元議員に働きかけ
るなど、地道な盛り上げをしていきましょう。

■ 江戸川区の動き（支給ガイドライン）

前号でお知らせした江戸川区障害福祉サービス等支給



ガイドラインの問題ですが、7月と8月に江戸川区障害者福祉課の課長さんたちと意見交換をする機会を得られ、こちらの懸念と要望を直接お伝えすることができました。その結果、10月を目処に、何らかの見直しはされるということはわかりました。具体的にどの箇所がどのように見直されるのかはまだわかりませんが、少なくとも、よりきつい制限につながるような規定や表現にはならないのではと期待します。

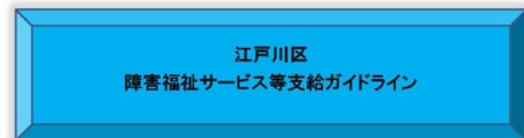
また、「重度訪問介護における支給ガイドラインの支給時間目安を超える時間数決定要領」というタイトルからして、非定型基準（目安）以上の支給量をどれだけ認めるかを決めるために、項目ごとに加算する時間数を決めておくのかと思いきや、個別に必要な時間を考え、結果的に基準（目安）を超えていれば非定型になるとのことでした。それは良いことだとは思いますが、それであれば、このタイトルは誤解を招くので修正が必要でしょうし、もっと言えば、そもそもこの要領自体、必要ないのではないのでしょうか？

残念ながら、10月に間に合わせるためにパブリックコメントを行う余裕がないそうだが、こうしたガイドラインや計画の策定過程に当事者を入れないことやパブリックコメントを省いてしまう辺りが、まだまだ江戸川区行政全体の問題であり、またそ

れを許してしまっている我々区民の側の問題でもあるのだと思います。

地方分権、地域主権の時代とは言われますが、民主主義をちゃんと成熟させていくために、官民ともに切磋琢磨しなきゃですね。

東京都江戸川区



江戸川区

平成 31 年 5 月

※江戸川区サイトより



い し けつ てい し えん しーかいえろ じ りつ せい かつ
意思決定支援ができるCIL(自立生活センター)になるには？

とも い しゃかい かんが か な がわ しゅう かい さん か ほう こく
「共に生きる社会」を考える神奈川集会2019参加報告

ひるかわ りょうこ
蛭川 涼子

つく い えん じけん はっせい ねん しゃかい じけん きおく ふうか
津久井やまゆり園の事件が発生してから3年、社会では「事件の記憶が風化してき
ている」との報道がされていました。思ったより早いな…と、心の奥がざわつく中、



が づ にち と とも い しゃかい かんが
7月27日の「共に生きる社会」を考え
る神奈川集会2019（第4回目）に
参加してきました。

ことし ないよう ねんまえ ねん
今年の内容は、16年前、2003年か
ら5年ほどをかけてながのけんにしこまごう
た460名の大型コロニーの地域移行に
めい おおがた ちい きいこう
取組んだ山田優さんの基調講演と、山田
さん、にしこまごう ちい きいこう
西駒郷の地域移行のフォローアッ
プにたずさわった三田優子さん、NHK

バリバラのコメンテーターとして出演されている玉木幸則さんの鼎談（3人で対談す
ること）でした。

こうえん ていだん ちゅうしん へいせい ねん がつ さくせい
講演と鼎談の中心は、2017（平成29）年3月にガイドラインが作成された
いまわだい いしけつていしえん やまだ にしこまごう だつしせつ ちい きいこう はなし
今話題の「意思決定支援」。山田さんは西駒郷の脱施設・地域移行の話をするなかで
なんど なに はな おも だ
何度も「いまさら何を話せばいいんか」「思い出すのがつらい」というようなことを
くち こうかい はつげん はじ りかい
口にされていて、なぜ後悔しているような発言をするのかな？と始めは理解ができま
せんでした。

ごじつ なんと しりょう よ かえ なか き やまだ ねんまえ
後日、何度も資料を読み返す中で、気づいたのは、山田さんが16年前、2003
ねん にしこまごう ちい きいこう たいせつ いしけつていしえん ねんご ねん
年から西駒郷の地域移行で大切にしたい意思決定支援が、12年後の2015年から
しゃかいほしょうしんぎかいしょうがいしゃぶかい ぎろん はじ ねんご ねん つく い
社会保障審議会障害者部会で議論され始め、その1年後の2016年に津久井やまゆ
り事件が起こっていたことです。その年度末にあたる2017年3月に意思決定支援
がくに さくせい やまだ なか しょうがいふくし いしけつていしえん
が国のガイドラインが作成されました。山田さんの中では、障害福祉が意思決定支援
のもちい きいこう すす いっぱんしゃかい しょうがいしゃ きやだいしゅうようしせつ ぜ ひ しん
の地域移行を進めても、一般社会での障害者の巨大収容施設の是非や真の
きょうせいしゃかい ぎろん い み おも つよ のこ なか
共生社会の議論がされないままでは、意味がない、そういう想いが強く残っている中
での「思い出すのがつらい」という発言だったのかもしれない…とようやくあのとき



の空気を理解したのでした。

それでもその後、「本人の意向を最優先」に考えて取組んだ当時の地域移行の経験を熱心に話されていました。意向というのは聞き手次第で、変わってしまうため、聴き取りの方針を作り上げ、ブレずに「本人の意向」を聴き取る調査に取り組んだこと。とはいえ、本人の地域移行を家族に押し付けることのな

く、無理に施設を出される不安を残すようなこともしない方法が必要だったこと。

「聴く事こそ最大の権利擁護。あなたは聞けるか」と山田さんは会場に問いかけてきました。意思が決定されるまでにはプロセスがあり、その支援は傾聴（＝よく話を聴くこと）から始まる。まずその人の意思を表してもらわないといけないので、その人の信頼を得られるかどうか。つぎに意思を形成（＝自分の気持ちを固めること）してもらうために、情報や経験を手に入れる必要がある。そうしてようやく、人は意思を決定する。意思決定支援までには、意思表示支援と意思形成支援があって、意思決定までたどり着いた際も、「全てのことは失敗ではなく経験。リベンジはいつでもできる」というメッセージを伝え続けられるかどうかだと、やっぱり熱っぽく語っておられました。

「意思決定支援」というのは、なんて根気のいることなのでしょう！！とはいえ、CILも山田さんの言う意思決定支援をずっとやってきたのではないかな、ということも改めて考えました。

CILの相談支援も傾聴から始まります（…と私は意識しています）。ピアカンで傾聴を身につけたピア・カウンセラーは、基本否定しません。何がしたい？怖い？一緒に考えよう。一人じゃないよ。あなたには力がある。きっとできるよ。やってみようよ。…そんな声掛けと傾聴を繰り返します。カウンセラー（支援側）が傾聴して、双方の



関係ができて、クライアント（本人）の意思が表出して、クライアント（本人）は
選択し、決定をしていきます。ただ、CILの意思決定支援は、いずれ“支援なし”
で意思決定できるようになる事がゴールのように考えている人が多かったのかな…。

集会の最後に、「津久井やまゆり園事件がもたらしたものが、地域生活を希望する
人と、入所生活を希望する人にふり分けて終わることのないように、私たちはこれ
からもずっと、見守っていきます。入所施設にいる人たちが、（中略）時間をかけて
その人の意向を聞くとりくみを神奈川県が継続することを要望します」という文言が
入った集会アピール文が採択されました。

「相模原の意思決定支援は本当に適切に行われたのか。やまゆり園の入所者は本当
に戻りたいと願ったのか。事件から3年がたった今、私たちがすべきことは何か。」
「西駒郷はムーブメント（一過性の流行）ではないと信じて、津久井やまゆり園が
再びGHの集合体とならぬように、やまゆり園で暮していた人たちが『どんな人か
関心を持てずにいてごめんね』と謝ることから始めたい」色々な発言が胸に刺さりま
した。

主催団体のひとつ、じりたまの磯部さ
んも最後に言っていました。「自分たちは
相模原の仲間たちの声をちゃんと聴けて
いなかった。そう自覚することから、薄
れ行くやまゆり園の事件と再び向き合っ
ていく。」

もうひとつ、「親亡き後」についての
意見が飛び交っていました。「国が『親亡
き後』という言葉を使うから親はやっぱ
り自分がみなければいけないと思ってしまう。」「日本はどうして二十歳過ぎたら親元
を離れて行く方向にならないのだろう？」興味深いと思ったのは、「障害に関する
8050問題（老いた親が中年の障害者の面倒を見ていること）は、親が一生懸命
サポートして、子供に地域生活をさせてきた結果だ」という発言です。「一生懸命の
親御さんたちが地域を信じられないから、自分達がいなくなった後、つまり『親亡き
後』の子供の生活を不安に思い、施設再建を訴えるという脱施設と逆行する発言をし
ていく」のだと。ああ、私たちは親御さんの話も聴けていなかった…！一人で出来る
ことは少ないけれど、出来ることはたくさん転がっている…深い反省の念を抱かざる
にはおれない7月なのでした。





くどう としこ
工藤 登志子



8月11(土)～14(水)まで
日本、中国、韓国の障害当事者交流プログラム「Road to K-pop」(助成：Lotte
Duty Free 財団、主催：D P I 韓国)
へご招待頂き、韓国のソウルへ行って
きました！



日本からは私を含めて6名、中国からはC D P F (中国の障害者連合)の方
など12名がソウルのバリアフリー視察
(コンサート鑑賞&シティーツアー)や
カンファレンス等に参加してきました。
今回のツアーの最大の目玉でも
あった Lotte Duty Free コンサート
はTwiceやBTS等、今韓国で
大人気のアイドルグループがたくさん
出演していてとても盛り上がりました。

コンサート会場であるソウルオリンピック体操競技場は人気アーティストのコンサート
でよく使われるいわばK-POPの聖地のような場所なのですが、車いすスペース
が50席以上もあり日本の代表的なコンサート会場では見たことのない光景でした！
車いすスペースには折り畳み式の固定椅子もあり、介助者や友人、家族と横並びで
鑑賞できるのも素敵だと思いました。きっと私がソウルに住んでいたら、しょっちゅう
アイドルのコンサートに行くだろうな～なんて妄想が止まりませんでした。

ソウルのシティーツアーでは歴史博物館やソウルタワー等の観光地巡りやショッピング
街でのお買い物を楽しみました。シティーツアーで行ったところは設備面ではバ
リアフリー整備が整っていたのですが、いくつか印象的だった出来事がありました。

ある日みんなでランチを食べに商業ビルへ入った時の事です。トイレを使おうと

い 行ってみると、なか には たいりょう そうじ どうぐ
 が・・・よく見ると従業員の私物まで
 お 置かれていて完全に かんぜん そうじょうたい
 ました。これではどう がんば っても くるま
 で入っていきません。ちょうど とうり か
 かった掃除のオバサンに にもつ だ
 らうよう ねが をお願いすると、「めんどう
 から うえ かい 上の階のトイレを使って。」と。し
 かしビル内にはその階にしか くるま よう
 トイレが無いのです。結局、私の かい 介助者も くるま
 づ 荷物を出してくれましたが、毎日掃除をしている従業員でさえ くるま よう
 こにあるのか 知らない、唯一の くるま よう
 トイレを倉庫代わりに つか
 使ってしまふ、という
 かんかく 感覚に少し かな 悲しくなりました。



また、他の場所では一般トイレが混雑しているために くるま よう
 健康者が けんじょうしゃ 長蛇の列を作ってしまう、 くるま
 使用者が しょうしゃ 最後まで さいご 後回しにされていまし
 た。このような状況は日本でも じょうきよう に ほん たびたび じょうきよう
 遭遇しますが、人の意識面での問題はどこにいて
 も ほん ちが 日本と違っていたの
 は、 かんこく とうじしゃ 韓国の当事者は 強い！ということ。 じょうき
 上記のような状況に出くわした時、タダでは
 お 終わらせません。 げんち とうじしゃ 現地の当事者たちは せいせいどうどう
 ひるむ ことなく 正々堂々と 向かって行き、 自分
 たちが とうじしゃ 困っているのか 相手に 理解 できる ひとつ ひとつ
 きちんと 説明 していました。私は 日本 で とうじしゃ じょうきよう
 同様な状況に出くわした時、 自分 がつ 自分の方が 引込んで
 我慢 してしまいがちですが、それでは ひとつ ひとつ
 人々の中にある “無意識のバリア”
 に 気づいてもらえません。この 無意識のバリアは いくら 制度を せいど
 整えたり ハード面を 充実 させても、 ひとびと 人々の意識が かわらな
 ければ ひとつ ひとつ
 残り続けます。



今回 韓国 で 見た 障害当事者 たちの 姿
 は、 とうじしゃ 障害当事者 としての 自分 に さまざま
 な 気づき を 与えて くれました。 彼ら の 想
 いや 姿 を 忘れない ように、 自分 が 社会 を
 変える という 意識 を もって 日々 を 過ごし
 て いきたい と思いました。



つちや
土屋

みねかず
峰和

夏と言え^{なつ}ばビール！ま^{なつ}あ夏
 じゃなく^のても飲^のむときは飲^のむん
 ですが、皆^{みな}さんは飲^のまれますか？
 僕^{ぼく}は好^すきなんです^が、すぐにお
 腹^{なか}がいっぱいにな^きっちゃう^き気が
 してた^のくさんは飲^{かん}めない感^{かん}じ
 なんです。最^{さいしよ}初の^{ばい}1杯^{ぱい}はすげー
 美味^うい^まんだけどね。



そんな夏には特に美味しく感じるビールですが、工場を見学できるのを皆さんで
 存知でしょうか。国内の大手4社（麒麟・アサヒ・サッポロ・サントリー）とも
 見学できるんですよ。僕は以前に麒麟ビール横浜工場へは行ったことがあったの
 で、今回はサントリーの「天然水のビール工場・東京武蔵野ブルワリー」へ行ってきました。

サントリーでは、「ガイドツアー」と「ザ・プレミアムモルツ講座」の2つのツアーがあって、所要時間はそれぞれ70分と90分でどちらも工場見学の後に試飲の時間があります。どちらも予約（ネット、電話：042-360-9591）が必要です。参加は無料です。

今回僕が行ったのはガイドツアー。キャッチコピーに天然水というワードが使われていることから、水にこだわっていることや、工場はすべて天然水の取れるところに建てられていることみたいなことの紹介がありました。ガイドのお姉さんが最初に映像を見ながら話し、その後、各製造工程を説明しながら見て回る





かん 感じです。なつやす き かん 夏休み期間だったからか、以外にもお子さんが多かったのにはちょっとビックリ。

けんがく だんさ 見学ルートには段差はなく、スロープやE Vがあり車椅子でも問題はありませんでした。説明は日本語ですが、スマホのアプリをインストールするとオーディオガイドとして英語、かんこくご ちゅうごくご たいおう 韓国語、中国語にも対応するそうです。

ちやんと ざんねん 仕込み工程で使われる大きなタンクの近くまで行けなかったこと。仕込みにはねつ つか 熱を使うため、タンクのある部屋はとても暑く、気温が35度くらいのこの日は40度をかるくこ 超えていたそうです。そのため危険と判断し、タンク近くでの見学はカットされてしまいました。



けんがく お ま 見学が終わるとお待ちかねの試飲タイムです。しーえむ かもあわ C Mでもおなじみの神泡をアピールした説明の後に、お姉さんたちがサーバーからグラスに注いでくれます。「プレミアムモルツ」「プレミアムモルツ・香るエール」「マスタースドリーム」のさんしゅるい しーいん しょうけい 3種類の試飲ができ、合計3杯まで飲めます。飲み比べができるよ。確かにあわ ちょう かお かん おい 泡は超クリーミーで香りも感じ美味しかったあ。この時は「香るエール」に限り泡へのプリントサービスがありました。4種類のえがら なか えら ひづけ はい えがら 絵柄の中から選べ、日付の入る絵柄もあり記念にはいいかも。ちなみにお子さんたちに



はサントリー「なっちゃん」の試飲ができます。

むさしの とうきょう 武蔵野ブルワリーは東京のふちゅうし もよ えき 府中市にあります。最寄り駅はJ R 南武線の府中本町駅で、ここから徒歩15分ほ

ど。新宿線からだ、京王線直通へ乗ると乗換は2回（橋本行へ乗車の場合、調布、分倍河原で乗換）で府中本町駅へ行けます。

京王線分倍河原駅から工場行のシャトルバスもありますが、残念ながら車椅子非対応です。ガイドさんに車椅子のまま乗車可能なバスについて聞いてみたところ、車椅子のお客さんは多く、そのような意見も聞いている。今後考えていきたいと言っていました。1階ロビーには車椅子トイレもあります。

ユーミンの歌（中央フリーウェイ：ちょっと古いか？）に出てくるこの工場へ、行ってみませんか♪♪



す て っ ぶ かいほう たいほう か STEPえどがわ会報が待望のカラー化！

STEPっ子パラダイスをいつも見て下さっている皆様、いつもありがとうございます。お陰様でSTEPっ子パラダイスも創刊から今号で第32号を迎えることができました。

お知らせが遅れましたが、実は「第27号 2018年7月号」よりWEBサイト掲載のPDFファイルは、カラーにて掲載しています。紙媒体の発行は依然としてモノクロではありますが、お手すきの際はカラーPDF版もお読みいただけましたら幸いです。

STEPえどがわWEBサイトの上部にあるメニューから「会報」を見てください。

<http://www.step-edogawa.com/>

自立生活センターSTEPえどがわ：障害者の自立生活を応援するページ

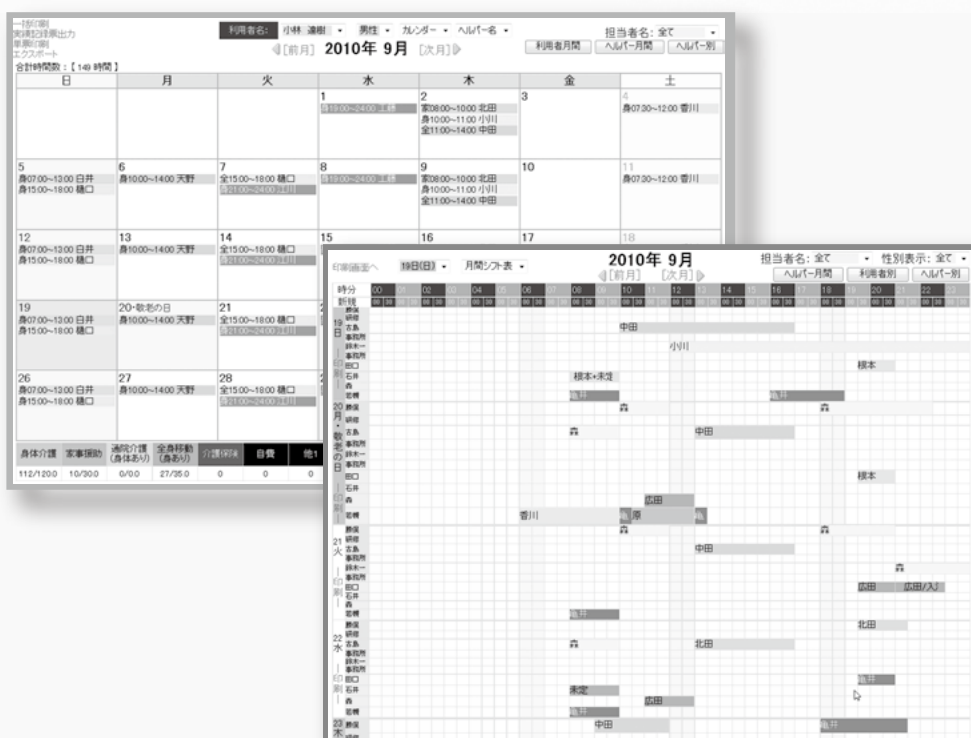


シフト表の
作成って
もうイヤ!



月額
800円
から

ヘルパーアシスト ならできる。



<http://www.helper-soft.net>

開発・販売元

 Mit's
 COMMUNICATIONS

有限会社ミッツコミュニケーションズ
 〒133-0065
 東京都江戸川区瑞江2-6-11 プレステージ瑞江303
 電話 03-5636-6027 FAX 03-5636-6024

かい ぶん ぼ しゃ 会 員 募 集

す て っ ぶ じりつせいかつ かいほう ぼりゆうむ ねん がつ かんこう
STEP えどがわは、STEP ポリシーとSTEP 訓の下、障害者、
の自立生活に係わる様々な問題に取り組み、ひいては地域に根ざした
社会貢献団体になることを目指しています。

つきましては、当法人の活動趣旨にご賛同いただける皆様に会員（正・
賛助）になっていただき、共に自立生活センターSTEP えどがわを支え、
育てて下さる仲間を募集します。

せい かい いん せい かい いん とう ほう じん てい かん さだ そう かい さん か
正会員（正会員は、当法人の定款に定めた総会に参加できます）

- とう ろく り ょう えん に ゆう かい じ
・登録料 5,000 円（入会時のみ）
- かい ひ えん ねん
・会費 5,000 円／年

かい いん さん じ ょ かい いん
サポーター会員（賛助会員）

- こ じん くち えん ねん くち い じ ょ う
・個人 1 口 3,000 円／年（1 口以上）
- だん たい ほう じん くち えん ねん くち い じ ょ う
・団体・法人 1 口 10,000 円／年（1 口以上）

かい いん とう ほう じん かん こう ぶ つ あん ない とう そう ふ い た
会員には、当法人の刊行物、イベント案内チラシ等を送付致します。

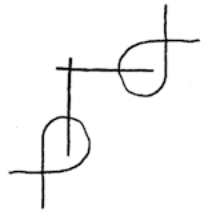
かい ひ の う に ゆう さ き
会費納入先

ゆう び ん ふ り か え じりつせいかつ
<郵便振替> 自立生活センターステップえどがわ No.00110-0-579238

ぎん ぎ り ぐ ざ とく て い ひ え い り か つ とう ほう じん じりつせいかつ
<銀行口座> 特定非営利活動法人自立生活センターステップえどがわ

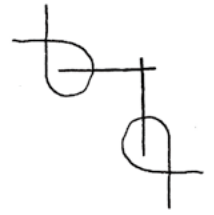
みつ び し ゆー え ふ じ えー ぎん ぎ り み づ え し て ん ふ つ う
三菱UFJ銀行 瑞江支店 普通 0548550





編集後記

へん しゅう こう き



す て っ ぶ ひつだん せつち
STEPにブギーボード（筆談ボード）を設置しました！
かみ つか きらく か か でんし
紙を使わずに気楽に書いて、書いたらさっと消すことのできる電子
メモパッド。事務局長のツッチーもすっかりハマったようで自分の
なまえ なんど か じぶん
名前を何度も書いていました。（リハビリかっ！とつつこまれてい
ましたが）これがあると安心してコミュニケーションをとれる人も
おおいのでいろんな場所に置いてほしいなあとおもいます。

へんしゅう
編集：



〒133-0065 とうきょうと え ど が わ く みなみのぎきまち
でんわ 03-3676-7422 ふあつくす 03-3676-7425
う え ぶ
WEB <http://www.step-edogawa.com/>
めーる
E-mail main@step-edogawa.com

